

氏名(本籍)	うちだ いっせい (北海道)				
学位の種類	博士(心身障害学)				
学位記番号	博乙第827号				
学位授与年月日	平成5年1月31日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	心身障害学研究科				
学位論文題目	自閉症児の常同行動に関する行動病理学的研究				
主査	筑波大学教授	教育学博士	小林	重雄	
副査	筑波大学教授	教育学博士	吉野	公喜	
副査	筑波大学教授	医学博士	宮本	信也	
副査	筑波大学助教授	医学博士	小川	俊樹	
副査	筑波大学教授		中野	良顯	
副査	筑波大学教授	教育学博士	市村	操一	

論文の要旨

本論文は、本論全V部10章、494ページ（1ページあたり1008字）によって構成されている。

本論文は、これまでの諸研究でなお明らかにされていない①自閉症状における常同行動の諸特性、②その下位類型である全身性と限局性常同行動の諸特性、③それらの刺激統制の様相、④それらの強化統制の様相、⑤それらの行動論的形成機序仮説に対応した治療教育方法の体系化、⑥新技法の発展可能性を実証的に検討することによって、常同行動を中心とした自閉症状の構造機能分析的な形成機序の解明、および行動論的治療教育方法の体系化を図ったものである。

「第I部 自閉症に関する研究動向と本研究の目的」の第1章から第3章においては、自閉症に関する研究動向と常同行動に関する研究動向をそれぞれ症状論、原因論、治療論の観点で綿密に検討している。そのうえで最も重要な研究課題として、小林重雄（1980）の階層的モデルのように、構造機能分析的観点から常同行動の形成機序モデルの構成、およびその機序に即した行動論的治療教育方法の必要性を浮き彫りにしている。そして、本論文の目的とその意義を明確にしている。

「第II部 自閉症の常同行動に関する巨視的分析」の第4章では、常同行動の範疇と診断基準における整合性、経過と規定要因、適応行動に対する発達妨害特性、および形成機序と他症状の形成に果たす役割について多面的に検討している。また第5章では、全身性と限局性常同行動の出現様相、経過と規定要因、適応行動に対する発達妨害特性、形成機序と他症状の形成に果たす役割について多面的に検討している。そして、常同行動の主たる下位類型である全身性と限局性常同行動を

治療することの教育的意義、およびそれらの形成的基礎条件を明らかにしている。即ち、全身性と限局性常同行動は、脳機能障害とそれに起因する対人行動障害を共通の背景要因にしており、それにそれぞれ粗大運動機能と微細運動機能の未成熟が特殊的に加わって発現基礎条件を構成しているということである。

「第Ⅲ部 自閉症の全身性と限局性常同行動の行動的基礎過程に関する分析」の第6章では、全身性と限局性常同行動について他行動との関連性、および先行事象としての社会的刺激、感覚刺激、先取行動との関連性を検討している。また、第7章ではそれらの強化特性と強化源について検討している。また、第7章ではそれらの強化特性と強化源について検討している。そして、自閉症の全身性と限局性常同行動はいずれも先行刺激事象の影響を受け難く、それらの大部分が始発段階においても持続段階においても身体産出的な自然的陽性感覚強化統制下にあり、それらの主成分は前者が前庭感覚刺激を中心とした近感覚強化刺激、後者が視聴覚刺激を中心とした遠感覚強化刺激であることを明らかにしている。

「第Ⅳ部 自閉症の全身性と限局性常同行動に対する行動論的治療教育方法の効用と限界」の第8章では、前章までの知見を総合的に論議し、全身性と常同行動の構造機能分析に基づく行動論的形成機序仮説の提起とそれらの機序に応じた行動論的治療教育技法の適用、各種般化効果の測定、臨床指針の信頼性を行っている。そして、全身性と限局性常同行動の自然的感覚強化刺激と同種類の事象が自然に随伴される身体運動遊びと玩具遊びの出現機会を設定するという、拮抗行動の自然的分化強化手続き(NDRA)の臨床的有効性と有用性を明らかにしている。また、第9章では、NDRA技法を適応行動の高次化への応用、同一性保持行動への応用、および自傷行動への応用を行っている。その結果、拮抗行動の自然的随伴事象に系統性をもたせるNDRAは示範提示だけで適応行動の質的向上をもたらし得ること、および治療困難な成人自閉症者の同一性保持行動と自傷行動に対してさえ人為的強化刺激なしでもそれらを適応行動に変換できることを明らかにしている。

「第Ⅴ部 総合考察」の第10章では、一連の研究成果に基づいて自閉症の形成機序、自閉症の治療教育、および今後の課題について総合的に論議している。特に重要なこととして、自閉症では行動機構そのものかなりの部分が身体産出的な自然的感覚強化統制下、および外的環境の知覚的同一パターンの再現という自然的知覚強化統制下に置かれていると指摘している。また、治療教育的には、NRDA技法の利点として、標的行動の適応行動への布置転換効力、行動機構それ自体の構造と機能両面の布置転換効力ないし社会的強化統制優位状態への布置転換、人為的強化操作の不要性と強化の自動調整、自然的強化随伴性に基づく良好な各種般化効果、時・場所・機会の相違に影響されないより本質的な学習機制の成立、自閉症状の形成機序に沿って現れる反応般化効果、適応行動の質的向上に対する応用可能性などがあることをあげている。そしてこのような利点を有するNDRA技法を小林(1980)の5段階5領域プログラムやLovaas(1987)の3カ年プログラムなどの総合的行動療法システム、あるいは早期治療教育、集中治療教育、治療教育場面の拡大化などに組み込むことによって、自閉症の治療教育成果に新たな局面を切り開けることが期待できると指摘している。

審 査 の 要 旨

本論文は自閉症児の常同行動について全身性と局限性に分け治療教育技法としてNDRAの有効性を統計的手法等を用いることにより明らかにしたところが特徴的といえる。

論の展開において更に検討を加えていかなければならない点もみられるがユニークな発想と豊富で系統的な研究結果は高く評価できる。

よって、著者は博士（心身障害学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。